

# ともに歩もう 石巻だより

伝えたい。過ぎ去った日々あの笑顔。  
暗闇に立ちすくんだ時、  
この記録が足元を照らす光となるように。  
そしてまた明日の朝を迎えられるように。  
朝日新聞社員がつづる。

## 子どもたち

あの日、帰らぬ旅に出た  
子どもたちの記憶を刻みます

### 佐藤健太くん「9歳」 みらいへ「がんばっから」

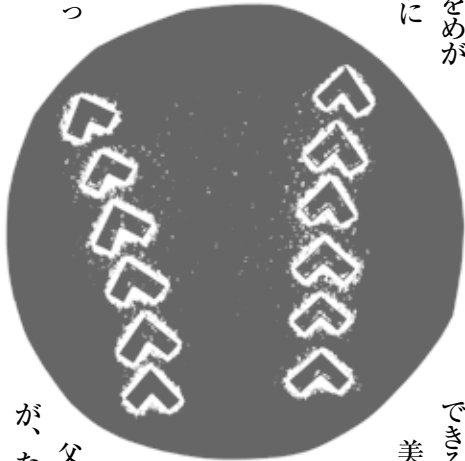
晴れた日の昼前だった。

佐藤健太くんが、休みに家にはいた父の美広さんに声をかけた。「おっ父、キャッチボールやっぺ」。休みの日はいつものことである。

2月末の日曜日。この季節、石巻は寒さもピークだが、めずらしく暖かだ。

向かったのは家のすぐ隣の牧草地。二人が投げ合う、いつもの場所だ。

「相手の目を見ろ」「胸をめぐりてこい」。言われた通りにしようとい生懸命に腕を振る健太くんは、このとき小学3年生。少しずつではあるが、ねらい通りにボールが走るようになってきた。美広さんは、何よりも本人にやる気が出てきたのがうれしかった。



野球を始めたのは、2年生の秋だった。

所属するチームは「大川マリンス」。地元のスポーツ少年団だ。そのころ6年生が退団したあとで、選手が9人に足りなくなり、そのままでは試合に出られないという。監督は美広さんの「朝野球」仲間だったこともあり、入団を頼み込まれたのがきっかけだった。

スポ少に入るのは自転車通学ができるようになってから、と美広さんも母のとも子さんも思っていたが、「打てなくていい。捕れなくてもいい。立っただけでいいから」という。低学年ながら新人戦に出場

その時の試合結果は、父母もよくは覚えてないが、たぶん負けたのだと思う。

でも野球を始めたことは、美広さんの願い通りだった。中学時代には野球部でセカンドを守った。高校に入って個人競技にひかれ、ボクシングを始めたが、大人になってからも野球は好きで、地元のチームで練習を続けていた。

健太くんには個人競技よりも団体競技の方が向いている、と思っていた。一人息子だが、いつも人の輪の中心にいるのが好きで、だれとでも友だちになり、周りをひっぱっていく。チームプレーでいろんなことがわかるはずだ。

### 初ヒットとアウト

やがて学ぶことは増えていく。

野球を始めて1年後、近隣市町村の少年野球チームが出場する大会に出場。打席に立ち、バットにあてたボールは三遊間に転がった。それが初めてのヒットとなる。

準決勝ではフォアボールで出塁し、三塁へ。その時だった。味方の打者が放った打球が高く上がり、グラブをかまえた相手チームの内野手が落球。健太くんは本塁を指して疾走し、とも子さんは「走れ、走れ！」と腕を振った。

が、審判は、野手が捕球したとみなす

### 明日の風

そこにはたくさん  
の花束が供えられ、  
訪れる人々は手を合  
わせ、涙を拭ってい  
た。どれだけの思い

が、その場所に込められているのだろうか。神奈川県川崎市のはずれ、多摩川の河川敷。中学1年生の少年が、10代の少年グループに殺害された現場だ▼そこへ赴いたのは、石巻市に住む鈴木典行さんのお誘いだった。御自身、大川小学校で次女の真衣さんを亡くされた。「子どもの命を考えたい」と東京に来た折に声をかけていただいた▼花束のそばにバスケットボールが置かれていた。少年はバスケット部だった。鈴木さんの目に涙が浮かぶ。大川のミニバスチームのコーチとして小学生たちを指導していた。「人目につかない河川敷ゆえに起きたのか」「加害者の少年にも、そうやってしまった理由があるはず」。考えたことを言葉にしようとお互いに懸命になった▼亡き人の遺した思いは、場所を問わず、慈しむように私たちに降り注いでいるのだと思う。でも、この世にある私、

「インフィールドフライ」を宣告。打者はアウトとなり、走者は進塁できない。美広さんは「戻れ、戻れ！」と叫んだが、三塁送球でアウトに。

本人はまるで納得がいけない。その夜、美広さんにたずねた。「おっ父、俺なんでアウトになったの？」

野球にはたくさんのルールがある。投げ打って捕る、だけではプレーにはならない。初ヒットを打ったことと合わせて、野球に向き合う気持ちこそがそれまでとは違ってきた。

テレビで熱心にプロ野球を観戦するようになる。お気に入りには楽天イーグルスだ。ルールのこと、プレーのこと、美広さんに次々に質問した。

あるとき、お祖父さんに頼んで、練習場所の牧草地に竹ぐいを立ててもらった。その上にボールを置いてバットスイングを練習する「ティーバッティング」のためだ。

チームの選手も増え始めた。同じ学年の子どもたちも入り、大人たちは「来年が楽しみだ」と話し合うようになる。そのことでライバル心が芽生えたのかも知れない。練習にも熱が入り、やがて、ひとつの夢につながっていく。

甲子園に行きたい――。

一家は大川地区の自宅から車で石巻市の中心に近い親戚の家を訪ねるとき、石巻工業高校のグラウンド脇をよく通った。フェンスの向こうには野球部の練習風景が見える。「この学校強えの？ 甲子園に行く、くらい？」「勉強しないと入れねえんだぞ」

## みらいのじぶんへ

2月末の日曜日は、父との最後のキャッチボールの日になった。

3月11日、東日本大震災の津波で大川小学校児童の7割が犠牲に。マリンスの子どもたちも何人も亡くなった。健太くんが見つかったのは4月のはじめだった。

震災の翌日は、みな心待ちにしていた、新チーム初の練習試合のはずだった。

遺品を整理していたとき、とも子もつらい。遺品を整理していたとき、とも子さんは机の引き出しの奥から、小さな紙袋を見つけた。中には20粒ほどの朝顔の種。袋の表には「みらいのじぶんへ けんたより」と記されていた。言葉が出なかった。

1年生のときに授業で植えて、とれた種らしい。同じ袋に入れてお祖母さんやよく行く床屋さんのおばちゃんにプレゼントしてたのは知っていたが、自分自身にも残していたことは本人も話してなかった。

すぐに植える気持ちにはなれなかった。でも震災から3年たった

春、引越した先

で7粒を鉢に入

れると一粒が

芽吹いた。さ

らに4粒植える



最後に投げ合ったボールは遺影の前に置いてある。父母が抱きしめている思い出はいくつもある。

送り迎えが難しいので塾には通わず、自宅で通信教育を受けていたが、震災の少し前、4年生用の英語教材が届いた。震災の朝、「野球と英語、両方できんのか？」と問う美広さんに「おっ父、がんばっから」。その言葉は今も胸に響いている。

とも子さんの心に残るのは日々の言葉だ。朝早くに出勤する母に「いつてらっしやい。きょうも頑張つてきてね」。とも子さんは「遅れないようにね」と応えるのが朝の風景だった。

車の中から練習を見ていた石巻工は震災の翌年、センバツ大会に出場した。8月生まれ健太くんが17歳になるころ、二人で甲子園を訪ねることにしている。

震災後、講演をたのまれば、各地へ出かけていく。話すのは大川小のこと、命のこと、悲しみのこと……。「がんばっから」という健太くんの後押しされているように思つて。

昨春、二人はほかの遺族とともに石巻市と宮城県を訴えた。なぜあの日、学校は子どもたちを救えなかったのか。結果はどうあれ、意味のある裁判にしたいと願う。

「みらいのじぶんへ」――。その言葉が何を伝えようとしているのか、これからも二人で考え続けていくつもりだ。

たちには、やはり「祈りの場所」が要る。そこが悲嘆にくれる人々の心の置き場にもなるからだ▼大川では、多くの犠牲を出した小学校の被災校舎を保存するか否か、の議論が行われている。先日の説明会に集まった人の意見は、「保存」が「解体」を上回った。強風が吹き荒れた3月11日の慰霊祭は、震災後初めて校舎の中で行われ、多くの人が祈りを捧げた。見るのはつらい。でも消えてしまうのは、もつとつらい。なぜ命を守れなかったのか、を考えるためにも校舎の価値はかけがえがない▼被災地には、多くの「場所」がある。幼稚園の送迎バスが津波を受け、園児5人が亡くなった坂道の脇には今も花束が置かれている。辺りでは復興工事が始まり、先日こんな看板が立てられた。「祭壇、花壇等は工事の支障となりますので、予め撤去くださるようお願いします」▼復興の大切さは言うまでもない。が、祈り、考える場所を消していくことは、本当に必要な「心の復興」を遠ざけることではないだろうか。



# 雄勝巡礼

石巻市雄勝町の港そばの  
雄勝病院の話から始めよう。

[第6回]

## 10日夕「元気でねー」と主任栄養士

めぐりくる日に思い出す。

春まだ遠い海に笑顔の女性がいた。娘であり、妹であり、妻であり、母でもあった。

ユーモアを口にする男性もいた。息子であり、弟であり、夫であり、父でもあった。

2011年3月10日。

午前7時に石巻市の気象観測所が記録した気温は零下3.5度。しだいに雲が去り、晴天が広がる。前日より風は冷たい。観測所から約12キロ北の雄勝湾。水面は、西風にゆれ、光の粒が次々と誕生するかのよう

に、きらめいていた。病院本館。1階の厨房でベテランの調理員が開口一番、22歳の栄養士に尋ねた。

「大丈夫だったかあ」

前日の地震の話だ。

「何ともなかったよ」。22歳の彼女は明るく答えた。その話はそれきりだった。

その後、厨房では入院患者の昼食の準備が始まる。

当時、40床のベッドは満床

だった。患者40人のうち、13人は入院して1年以上になる。7

年余り入院している人もいた。

40人の平均年齢は84歳。腹

部に通じた管から栄養をとる人が多かったが、口から食事が出る人も、10人ほどいた。

その人たちの1食1食の献立を練り上げるのは、佐々木弘江さん。42歳の主任栄養士だ。

その献立に従い、22歳の若手栄養士が食材を調達する。

人口4300人の雄勝町内の店も利用した。

豆腐屋からは料理に合わせて木綿や絹の豆腐を仕入れた。

ベッド向きにはお椀で届けるが、献立に鍋ものを加え、焼き豆腐も買った。

ヨーグルトは牛乳屋から。

果物の缶詰、切り干し大根や干しシイタケ、麩、高野豆腐や小豆も町内の商店で購入。小豆は赤飯用だ。元日に餅

を用意したこともあったが、患者のみこむ力が弱まり、餅はやめて、赤飯にした。のどに詰

まらせないよう、もち米に、うるち米を混ぜた。

病院前の県道を行くと、道沿いに、その商店がある。町唯一の信号機の手前だ。

若手栄養士が帰りがけに立ち寄ると、お年寄りの店主夫妻は「元気かあ」と迎えた。

口々に「あがつてけえ」「食べへてけ」と新商品のお菓子をすすめ、世間話が始まる。

病院は食材の調達と調理を民間会社に委託していた。

若手栄養士も、調理員も、委託先からの派遣職員だ。厨房の病院職員は佐々木さんだけ。

厨房わきの四畳半ほどの事務室で、佐々木さんは若手栄養士と肩

を並べて机に向かう。10日夕方。日脚がのびて、窓の外には

明かりが残る。若手栄養士は豆腐屋や牛乳屋の納品書

を整理していた。午後5時すぎ。先

に帰る佐々木さんが、彼女へ声をかけた。

た。

「しばらく顔を見られないけど、元気でねー」

休みをはさむ時の佐々木さんのお決まりの声かけだ。11日は若手栄養士の公休日。いつものように「はい」と返す。

厨房に若手栄養士と調理員が残った。夕食後の食器を手で洗う。食器洗浄機はなかった。

作業台、コンロ台、と順に調理員が洗剤で拭く。その後ろを若手栄養士が水拭きして歩く。

次に調理員は、残る水分を

## 11日昼前の事務室にいつもの談笑

11日の朝。

澄みきった空が広がる。前夜の雪が道端で輝いていた。

拭き取る。後を追う若手栄養士がアルコールを吹きつける。

午後6時すぎ。ベテランの調理員からも、い

つもと変わらない声がかかる。「遠いんだから早く帰れ」

病院から自宅まで車で1時間近くかかる彼女を思いやる。

「お先しまーす」

街路灯が県道を照らす。支柱1本に2個ずつぶらさがるそ

の明かりは、ひな人形のほんほりのよう。沿道に軒を連ねた店や家から白い光がもれていた。

石巻市の気象観測所による

と、午前7時の気温は零下1.9度。風は弱まり、日差しがま

ぶしい

雄勝湾を望む山々も、薄い雪化粧を残していた。

病院の本館1階。

正面玄関を入った奥の右手に事務室がある。

「おはようございます」

太く響く声で朝の第一声を発するのは牧野まり子さん。

40歳の事務職員だ。45歳の男性職員の隣に着席する。

事務室の一角に流し台とガスコンロがある。やかんで沸かした湯を、白いポットに入れ



## 女川町議会 福島を視察⑥

### 今も全域避難の町に 「帰町準備室」

2014年7月。女川町議12人が、東京電力の福島第一原発事故の被災地・福島県浪江町の役場を訪ねると、1階にいた職員たちは起立して迎えた。

女川町議の鈴木公義氏(56)は、カウンターに掲げられた課の名称を目に留めた。「帰町準備室」。複雑な思いが胸に広がる。「帰れないんだけど。そうするしかないっていうか……」

震災から5年目を迎えた今も町全域に避難指示が出ている。約2万人の全町民のうち、帰る意思を示した人は18・8%。

17年3月に一部地域は避難指示解除の予定だが、放射能汚染を除く作業の着手は当初より2年遅れた。除染で出た廃棄物の中間貯蔵施設が、隣接する大熊町と双葉町に造られる。両町にある福島第一原発の廃炉作業は今後、数十年は続く。

「我々は少しずつ変化し、希望が見えてくるよね。浪江や大熊の人たちは見えない。事故があったら、原発は地域を終わらせてしまう」。鈴木氏は息をつく。

今は仮設住宅に暮らす。15年夏に仮設住宅そばの高台の宅地造成が終わり、15年中には新居に入れる見込みだ。

ゆくゆく女川原発の再稼働にも向き合う。女川町議会が女川原発1号機の誘致を満場一致で議決したのは1967年。誘致は、鈴木氏が子どもの頃に決まっていた。79年に1号機は着工。1号機が出来てしまった以上、2号機、3号機の建設に反対する考えは起きなかった。

「『原発は絶対安全だ』とは思っていない。リスクを背負っているからこそ、国の交付金があるっていうことがあるんだし。でも、毎日考えていたら、怖くて生活できない。だから、思考停止になっているところはあったのさ」

桐ヶ崎の浜で代々、漁を営む。2001年9月11日に米国で起きた同時多発テロの後、女川湾で警備の船を見るようになった。「原発はそういう危険なところなんだよって再認識させられた」と振り返る。

そして浪江町では原発事故の現実を確認した。が、「即、停止」を求める気持ちにはなれない。「中東(産油国)の不安定さとか考えると、原発という選択肢を持つのも、国の安全保障的には必要なのかなという部分は捨てきれない」

る。

そばの食器棚には職員たちのマグカップが置いてあり、各自でコーヒーを入れる。

ガラス窓越しに、玄関を出入りする外来患者たちが見える。

金曜日のためか、その日の外来患者は少なく、昼前にはみな帰っていった。

事務局長は、開会中の市議会へ出席しており、不在だった。

事務職員2人はしばらく談笑していた。牧野さんがよく口にしたのは、子どもたちの話だった。3児の母である。

「うちのひさが……」

中学1年生の長女、陽紗さんの話はよく出た。バレーボールが上手なことを喜んで語った。

小学6年生の長男、大輔君の話も出る。野球が得意だ。同じ

く野球少年の子をもつ男性職員と話が合った。陽気に声を立てて笑う。

防災行政無線の時報が正午を告げる。休憩時間だ。それぞれの机で昼食をとる。

牧野さんは弁当を作った持ってくることもある。同居の義母、

志津子さんがカレーを作った翌朝はそれを皿に盛ってラップをかけ、パンダナで包み、持参した。車通勤ならでは昼食だ。

午後。

1階の厨房に、主任栄養士の佐々木さんがやってきた。

午前中は、中学3年生の長女、春香さんの卒業式に出席するため、休んでいた。

式後、夫の勇人さんに「今日は1日休んだら」と言われたが、帰宅して着替え、病院へ。

看護部長の末永三和子さんも、この日は出勤していた。

自宅で3月の勤務表を作りながら、夫の久さんにはこう話していた。「年休とれるんだけども。前の年の分もほとんどあんだけど。人が足りないから月末

### ちよつとした勘違いから病院へ：

その頃、ちよつとした勘違いから、休みのはずの若手栄養士が病院へ向かっていた。

彼女は、主任栄養士の佐々木さんが長女の卒業式に出るため丸1日休みだと思込んでいた。

午前中の用事を済ませると、厨房をひとり切り盛りしている調理員を手助けに行こうと考えたのだった。

小雪がちらついていた。

まで仕事が入っている」

59歳。定年を前倒しして、3月末に退職予定だったが、年休の消化は考えていなかった。

午後2時。気温は前日より2度ほど高めの4・6度。そよ風が南から吹き始めた。

北上川の堤防道路を下り、横川の集落をぬける時だ。

(あ、タイヤのパンク。最悪だ)

車を止めると、周囲の車も止まり始めた。

(あれ、私だけじゃない)

途端に激震を感じた。

(大変、急がなくちゃ) 調理員を案じ、河口に向かつてアクセルを踏んだ。

大川小学校の手前で右折。標

高約80メートルの山腹へ。全長約1キロの釜谷トンネルをぬけ、山道を一気に下りる。

今、ふりかえれば、当時、対向車と次々すれちがいで、自分だけ逆走するように雄勝港へ向かっていった。思えば、津波はうとかった。

前年のチリ地震の後に大津波警報が出て、事務室で書類に目を落としていた。

「上にあがれーっ」と大声が聞こえ(えー、仕事しているのに)と思いつながら、重い腰を上げた。厨房では「どうしよう、どうしよう」と、調理員がうるたえていた。

その調理員が、今この時、ひとりで厨房にいるのだ。

海岸沿いに西へ。若手栄養士は病院へ急いだ。